



ピッポ新聞

2003
1
No.171

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500 円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

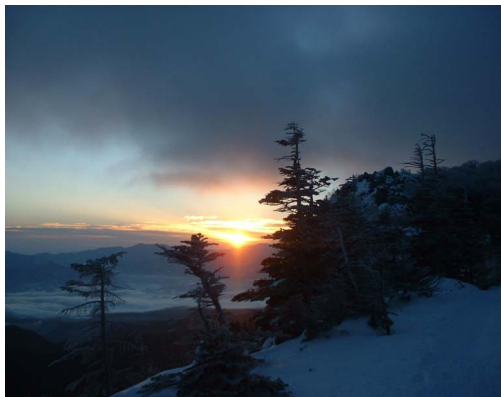
〒424-0886 清水市草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

Email pippo@diana.dti.ne.jp

二〇〇二年十二月三十日～三十一日
北八ヶ岳の山小屋で



2002 年 12 月 31 日午前 7 時 02 分の日の出 (天狗岳への途上で)

するのだから。「うたうたい」の「ア」

「ア」などと呼ぶ近頃の音楽ときたら、すべ

勢いよく燃えている薪ストーブの前で、ぼくは、横になって肘枕で文庫本を読んでいる。しかし、先程から活字に集中できないでいる。それというの、山小屋中に響きわたっているピアノの音のせいである。それは、けっして不快というわけではない。それどころか、積極的にピアノの奏でる曲を口ずさんだり、口笛で唱和したりして楽しんでいっているのだ。次つぎに演奏される曲のほとんどが、ぼくの知っている曲で占められているからだろうか。今、ピアノからは、「山の娘ロザリア・・・」という曲が流れている。山小屋で聞くピアノが、こんなにも気持ちよ

てぼくの耳には音楽としては届かない分、余計に今耳にしている懐かしい曲に郷愁を誘われるのかもしれない。曲は「北帰行」に替わった。ぼくの心は、満たされているのである。

今日は、天気は最高だったし、雪の状態も申し分がなかった。山道を一步踏み出したときには、気分は高揚し、ぼくは喜びであふれていた。トレースははつきりし、安定した雪道をたどるだけであつたのである。夏道よりも歩き易く、黒百合ヒュッテまでは、無雪期よりも時間も短くてすみそうであつた。そうなのだ、問題など何も無かつたのだ!

最初の40分ほどはスローペースではあつたが、快調だった。登りが緩くなつたので、さて、少しペースを上げようかと考えたのだが、何故か、足に力が入らない。ペースを上げるところか、意志に反してどんどんダウンしていった。そのうちに右足の大腿部が軽いケイレンを始めた。そのまま歩行すればケイレンがひどくなるので、暫く立ち止まって休み、治まるのをまつた。それから、歩き出したが、30歩と進まないうちに、



天狗岳の山頂にて 2002年12月31日午前7時45分

今度は左足大腿のケイレンである。また立ち止まって治まるのを待って歩き出す。100歩ほど進むとまたまた、右足のケイレンだ。

これが、ぼくの悪戦苦闘のはじまりであった。60代の人、50代の人、40代そして、若者が、どんどんぼくを追い越して登ってゆく。こちらは焦れども、10歩あるいては3分休み。5歩進んで5分休みの繰り返しだ。なにしろ、足を前へ進めれば、大腿が「つる」のだから。それに先程から息切れも激しくなってきた。あー、なんたるていらく！

ぼくは冬の山から完全に拒否されてしまった。甘く考えていたわけではないが、どこかに油断があったのかも知れない。振り返れば、夏に白馬岳に登って以来、山登りはおろか、体を動かすことなどほとんどしなかった。かろつじて続けていた週1回のジョギングも2ヶ月も前から止めていた。ぼくの体力は、同年代の並のオッサン以下であることを思い知らされたのだ。

そんなわけで、息も絶えだえに黒百合ヒュッテにたどり着いたというわけである。いつの間にかピアノは沈黙をしていた。満たされた気分のぼくは、もう文庫本には集中できないで、特等席(ストープの前)から、ポツリ、ポツリと到着する登山者を寝っ転がって眺めていた。

そんな中、松葉杖を突いた単独の若い女性が到着した。これには、ぼくは驚いた。彼女が近くにやってきたとき、「足どうしたんですか?」と、思わず声を掛けていた。(ぼくは普段は若い女性になど恐ろしくて、声を掛けることなどできないのであるが・・・)

「こう声を掛けながら、一瞬しまったと思っただ。もし彼女が障害者だったら、何と失礼な質問だったかと考えたからである。しかし、彼女は「去年、北アルプスで滑落して靱帯を断裂してしまったの。その後遺症です。去年の今頃は病院のベッドでした」さらに、「私、その前はね、ロッククライミングをしていて滑落し、足首を複雑骨折したのね」などと、けろつとして答えたのだ。ぼくはただ、ただ「スゴイね!」と言うしかなかった。「明日はどこへゆくのか?」「明日は天気が良ければ、硫黄岳までいこうかな」だって。続いて、ぼくは「そうまでして、君を山へ向かわせるものってなんだろうね」と聞いたのだが、この問いには彼女の答えはなかった。

夕食の後、炬燵を囲んで、何人かのひとと談笑をした。こんな時の話は決まって、今日はどこから来たとか、明日はどのコースをたどるのかということからはじまり、

これまでの山行の話が多くできるものだ。それも楽しい。

途中、トイレ(ここのトイレは、別棟にあり、いったん外へでるのだ)にたったとき、空にオリオン座が輝いていた。オリオンの一画をなすペテルギウスのずつと右上には、清少納言が枕草子のなかで「星はさぼる」と表した「す



やはり天狗の頂上 これはおまけの写真

ばる」も確認できる。その右は雲に被われて見えないけれど、天の川が横たわっているはずだ。この星空を眺めただけで、なんだか得をした様な気がした。小屋の入り口の寒暖計は、氷点下13度をさしていた。中へ入ろう。

夕べから、明日はどうしようかと、ずつと迷っていたのだが、6時の朝食の時には、ぼくは今日の行動を決めていた。やはり体力に自信がもてないから、赤岳への縦走を止めて今朝、天狗まで登って下山しよう。

6時半、デジカメだけをポケットに入れ、空身で小屋を出発した。空にはまだ三日月がはつきりと残っている。その右下には明けの明星だろっか?星が一つ輝いている。森林限界を越えたところで、雲が赤く染

山里からの便り

家庭内自然回復論 (その2)

まってきた。間もなく日の出た。ポケットからデジカメを取り出して、日の出を待った。何度かシャッターを切るうちに、雲から太陽が顔を覗かせた。2002年最後の日の出である。時計を見ると7時2分を指していた。ところで、明日1月1日の日の出は「初日の出」と呼ぶが、大晦日のそれは特別な呼び方があるのだろうか？

森林限界を越えると、吹く風が身にしみる。口の周りがしびれてきた。「これだ！」この感覚こそぼくに冬山を体感させてくれるのである。7時45分天狗の頂上に立った。先行者が一人。お互いに記念写真を取りあつた。今日も天気はいいようだ。

小屋に戻ると、既に泊まり客はあらかた出発した後だった。今朝もピアノが鳴っている。コーヒーを注文して(ここのコーヒーは注文すると、豆を挽いて入れてくれるのである。気に入ったので、昨日から3杯目の注文だ)、ゆっくりと味わって飲む。

昨日3時間かかった洪温泉までの山道を50分で降りきった。温泉に浸かっていたら、又足が「つって」しまった。今回は下山が正解だったようである。

それにしても、黒百合ピュッテのあのピアノはどやって運んだのだろうか？ヘリコプターに吊り下げて運んだのか、それとも解体して担いで運んだのだろうか。「山小屋にはピアノがよく似合う」！？

さて、ピアノを弾いていたのがうら若き女性であれば、申し分なかったのであるが、髪を丁髷にした無骨な中年男性であったことを報告して、筆を置くとしよう。

自然というものは、ただただ、己の為すべき事を

為しているだけなのです。草木は太陽光と二酸化炭素、水という無機物から有機物つまり、葉や木の实などを作り出しています。それをウサギや、リスなどの草食動物が食べ、さらにこれらの小動物をキツネやイタチなどの肉食動物が食べているわけです。

やがてこれらが死ぬと、キノコや菌類が栄養という形の無機質に戻し、再び植物の肥料として役立つのです。

自然はこの行為を嘗々と繰り返しているだけで、作為的なものではありません。だから人間に対して癒してくれとか、感動を与えてくれるといった、特別の投げかけは、本当は無いのだと思うのです。与えられることに慣れてしまった現代人は、そのところを錯覚している節があるようです。

自然とつき合うということは、自然の有り様に目を向けて、自分たちに何が必要かを、読みとることだと言えます。待つだけでも自然は何も与えてくれません。自分から行動して初めて自分の中に自然を取り込むことが出来るのです。美しい夕焼けが広がっていても、それを能動的に見ようとしなければ、その美しさを感じる事ができないのです。

最近、自然体験活動とか、野外教育、環境教育といった催し物が、学校、地域、自治体で企画される事が増えてきました。そのことは大賛成です。私自身、森林インストラクターという、森の案内人と

もいう資格を取って、県有林課(山梨県)の人たちと、色々企画を立てる側に立っています。参加者はたいがい喜んで帰っていきます。企画する側に身を置いていて、何ですが、最近、あまりにもこういう企画が多すぎて、ちょっと気になります。ヘタをすると、与えられる事になれてしまって、自然にたいして感覚が麻痺してしまう懸念があります。

家庭内自然回復論なんて、ちょっと格好付けた言い方をしましたが、じつは、このことなんです。何も自然とつきあうにはこういうところへ行かなくたって、家庭の中でも、自然を読みとろうとする姿勢があれば、同様のつきあい方ができると思ったわけです。

たとえば、料理がそうです。家庭の中で一番興味をひく中心的な行為、自然素材を使う技術のさいたるものですよ。その中心に立つのはお母さんですが、ご心配なく、たくあんを自分で漬けましようというのではなく、たくわんはなんで、パリポリするんだらう。生のダイコンのときと違うなど、かんじることができたときが、自然とのつきあいの始まりなのではないでしょうか。日常の中にだつて、自然はいくらでもころがっているのです。

たくあん一つとつてみても、ダイコンを干すと言う行為は、科学的なこと、民俗学的なこと、歴史学的なことなど、どんどん広がって、深めることが出来るはずですよ。さて、今夜は家族揃ってパリポリやってみませんか。

佐久間雅哉

おじさんの世迷い言

1日予定より早く山から戻ってきたら、新年早々世の中、腹立たいことばかりが目についた。暮れに、クロナコ大和の人が、メール便の集荷に來た折り、年末年始の休みについて聞いたところ「休みはありません」とのことだった。利用者にはとても「便利」なことだけど、年末年始に宅配をする必要が本当にあるのだろうか？世の中では、これを「便利」と呼ぶようだけれど・・・。

今度はテレビを見ていたら、ニュースで1月1日からデパートが開店し、殺到したお客が、「福袋」を買い求める姿を映し出していた。

この「福袋」を買い求める心理がぼくにはとうてい理解できないことの一つである。どうして自分が必要でない物を安いと言うだけで（これだって本当に安いのかどうか、はなはだ疑問である。普段は暴利を得ている何よりの証ではないのか。だったら普段からその値段で売れ！）

それはともかくとして、元旦から店を開けるのは初めてだとニュースは伝えているのだが、この点こそが、ぼくが腹立たしく感じた理由である。

こういうのを「抜け駆け」と言うからである。これは、去年名だたる大企業が脱法行為により、企業倫理を問われたばかりであるが、これらの企業と質的には全く替わらないと、ぼくは思うのだ。ただ、

法律を犯していないというだけで、自分さえお客を獲得できれば、「他人さまなど知ったこちゃねーよ」という行為なのである。

しかし、この抜け駆けは何の意味も無いことは、ちよつと想像力を働かせれば分り切ったことなのだ。最初の年はこのデパートは、去年よりも売り上げがあがるかもしれない。が、しかし、来年からは他のデパートもこれに追隨することは明らかなのである。

ところが器は同じである。いやむしろ、不況下で、器は年ねん縮んでいるのだから、売り上げは元の木阿弥である。ではこれによつてもたらされる物は何かと言えば、労働強化と無駄なエネルギーの消費だけである。

コンビニを例にとれば、これは自明のことだ。かつて「セブンイレブン」の名前が示すように朝7時から夜11時までの営業（これだって、零細な個人商店にとつては脅威であった）だったものが、いまや、24時間営業が常態化している。始めの頃はこの形で売り上げを伸ばしたかも知れないが、今やつづれていく店も多いと聞く。

コンビニ同士が争っている分には一向にかまわないうが、その影響を被つて閉店せざるを得なかった町の多くの小売屋さんには大迷惑であった。ある意味で、これは我々の生活の不便さを促進することにもなったのである。貴方の町には手軽に行ける八百屋さんや乾物やさんが今もありますか？

ここでも、無駄なエネルギー消費と労働強化が残っただけである。今にきつと、終日営業のデパートが出現するに違

いない！それが証拠に既に24時間営業のスーパーがあると聞く。

こいつ現象に対して、我々消費者も大いに考える必要があるのではないか。

一企業のもうけのために、全世界が課題にしている、地球温暖化や環境破壊にこれらの行為が拍車を掛けることになっていないことをだ！

ではどうしたらよいのか？ことは簡単である。去年消費者が、その行為が正しかったかどうか知らないが、「肉」を暫く買わなかったように、抜け駆けする店ではものを買わないことである。

遅くまで営業している店は、反社会的行為だと認識して、物を買わなければよいのである。売り上げが上がらなければ抜け駆け企業も、余分な経費を使つてまで遅くまで営業しなくなるだろうし、エネルギーも余分に消費しなすむようになる。

筑紫哲也の「ニュース23」で「スロー・ライフの薦め」というのを提唱しているが、賛成である。我々は「豊かさとは何か」をもう一度、考えてみる必要があるのではないだろうか。

少なくとも年始年末にわずかばかりの売り上げアップのために働くなどということ、豊かさとはほど遠い行為であると思うのである。こんなのはデパートがデパートを否定する行為であると思うのであるが、みなさんはいかがお思いですか。

すみません。今月号は（いつものことですが）子どもの本屋の新聞とはかけ離れてしまいました。反省！来月は正常にもどります。